第五回内国勧業博覧会と開会中餘興としての書画

前川知里

はじめに

大阪において最も早い時期に建設された美術館は大阪博物場[1]内の美術館である。大阪博物場は明治八年に創立し、昭和二十年の大阪大空襲によってほぼ焼失するまで七十年間存在していた[2]。明治二十一年に開館した美術館では、日本画、南画を中心とした多くの展覧会が開催されているが、ここには書も含まれている。商品陳列館として誕生した大阪博物場は、美術館開館後も元来の性質を引き摺っていた。そのため近代的な「美術」ではなく、当時の大阪に住まう人びとの間で親しまれていた書画の影響が色濃い東洋美術概念の延長線上にあるものを取り扱っていこうという意識の下で、書を内包していたのである[3]。

大阪で第五回内国勧業博覧会が開催された明治三十六年、大阪博物場美術館では絵画と書が分け隔てなく展示され、さらに昌隆社や十八会などの煎茶団体は「書画」のかたちで展観を行っているように、大阪では「書画」概念が根付いていた。そしてこうした場には村山龍平、藤田伝三郎、住友吉左衛門に代表される多くの実業家が関わっていた。一方東京では、明治十五年に岡倉天心と小山正太郎との間に起こった「書ハ美術ナラス」論争や明治二十年に誕生した東京美術学校において書道科が設置されなかったことに象徴されるように、「美術」に書を含めないことが多かった。

内国勧業博覧会における書の部門設置状況については、これまで佐藤道信をはじめとする多くの研究者が指摘しているように[4]、書画から書と絵画に分離したことによって第五回内国勧業博覧会では書の部門が設けられることはなかった。一方で、第五回内国勧業博覧会には全国書画倶楽部が設置され、ここに書家も参画している。加えて泉布観では、藤澤南岳や森琴石など書画家としても著名な人々の手によって千瓢会が催され、さらに日本美術協会大阪支会による豊公遺物展覧会や東洋美術奨励会による全国新書画展覧会といった書画にまつわる催しが複数開催されている。しかし、これ以前の内国勧業博覧会の際に刊行された『博覧会案内記』には、管見の限り開会中餘興としてこうした展覧会が催されたという記述は見受けられない。

明治五年から開催された京都博覧会では、開会中餘興の一環として書画揮毫席を設け、書画展覧会を開催している。このように、関西の博覧会ではこうした開会中餘興が定着していた。全国書画倶楽部や千瓢会などの催しは、まさに開会中餘興として第五回内国勧業博覧会に設置されたものである。しかし、こうして併催された書画に関わる催しについて先行研究では言及されていない。

本稿では第五回内国勧業博覧会開催中の催しに着目し、その実相を確認する。これまで、第五回内国勧業博覧会は書部門が設置されなかったことから、官製「美術」における書と絵画の分離を象徴する出来事として取り扱われてきた。一方、その開催の実態はこれと異なり、博覧会開催を実行する人びとは公に含まれなかった書を「書画」として博覧会に付随する催しもの、つまり開会中餘興において展示している。したがって第五回内国博覧会に併催された催しを確認することによって、制度上では確認できない、当時の大阪における書をめぐる実相を確認することとしたい。

一　第五回内国勧業博覧会美術館と「美術及工藝」

明治三十六年、大阪で第五回内国勧業博覧会が開催された。大阪での開催は、明治三十一年に大阪商業会議所会頭の土居通夫が貴族院議長近衛篤麿あてに「明治参拾五年ヲ以テ内国勧業博覧会ヲ大阪ニ開催センコトヲ希望スル請願書」を提出したことをきっかけに実現した[5]。明治三十二年初めには大阪商業会議所を中心として第五回内国勧業博覧会同盟会が結成され、土居通夫を会長に誘致運動が進められた。二月六日の大阪市会では市をあげて博覧会誘致運動を展開する方針が決定し、十六日には大阪参事会・大阪市助役平沼淑郎名で近衛篤麿あてに「第五回内国勧業博覧会ヲ大阪ニ開クノ請願」書が提出された。これらの誘致運動及び第四回内国勧業博覧会を京都で開催した際に第五回は大阪で開催することが閣議決定されていたことを受け、四月十九日に大阪での開催が正式に閣議決定された。このように、大阪での第五回内国勧業博覧会開催のきっかけが大阪商業会議所会頭による呼び掛けであったことから、この開催は商業との結び付きが強かったことが読み取れる。

大阪府では、第五回内国勧業博覧会を開催するにあたって、そこで建設する美術館を恒久的なものにしようという計画が浮上する。

明治三十二年の『読売新聞』には、「大阪の美術館」と題して次のように報じられている[6]。

大阪に開くべき内國勧業博覧會は美術館を大阪中の島公園の近接地に設けて永遠保存すべき筈なる由

四年後の内国勧業博覧会に向けて、美術館を建設する地として中之島公園周辺がその候補地として挙げられていたようである。そして、それを「永遠保存すべき筈」であると述べている。

同年九月の『読売新聞』では、第五回内国勧業博覧会の用地が確保されたとして次のように報じている[7]。

大阪市會にて紛擾を極めたる末種々の風説さへ傳へられたる第五回全國博覧會敷地問題に就ては曩に同市會の決議に依り茶臼山、桃山、天下茶屋、福崎新田の四ヶ處を撰擇して農商務省に申請したるが去四日敷地は愈々茶臼山と決定し美術館は其附近に水族館は中之島公園に設置するに定めたりと

当初の計画から変更があり、美術館は茶臼山付近に建設されることに決定した。これは現在の天王寺公園の位置である。

明治三十六年、予定通りに第五回内国勧業博覧会美術館は茶臼山に建設された。これは仮設の建物ではなく、漆喰塗りで仕上げられ、五五八坪の広さを誇るものとなった。美術館の外観は図1に見える。二階建ての建造物で、西洋風な外観であったことがわかる。内部の様子は図2から窺える。西洋風の内装が施された館内には所狭しと絵画が展示されている。館内の展示品には軸と額の双方が確認できる。柱にも額が掛けられていることから、作品点数に対して展示スペースが狭かったであろうことが想像される。

しかし、この美術館は必ずしも賞賛されるものではなかった。美術評論家の関如来は第五回内国勧業博覧会において美術館を観賞した際、次のような感想を述べている[8]。

余輩は前報に於て今回の教育館を評して、各種美術工業學校生徒の作品展覧會場也、寫眞印刷の列品場也、□療機械の廣告場也、琴、三味線、洋樂器の販賣場也、本邦今日の教育上の状勢は更に察知すべからざる無知の教育館也、無能の教育館也、不可思議の教育館也、五回博覧會の教育館は遂に是れ無教育館と成り了れりとまで絶叫したるもの也。教育既に斯の如し、次で美術館に移れば圖らざりき余輩は是れと類似の斷定を亦本館に於て再言せざるべからざるの不幸に接せんとは。

是れ畢竟するに、出品點數の多かりしと、大幅の畫の豫想外なりしにも因るべしと雖も、而かも當初建築設計の粗漏なりし罪は決して免れざるべく、余輩は平生上野公園内五號館に入りて、其建築の不備、其陳列の不可を鳴らせし眼を以て今この美術館に臨み、更に一層の窮屈、一層の不整備、不秩序を感ぜんとは、夢にも想ひ到らざりし也。

（※□解読不明文字である）

五号館は第三回内国勧業博覧会のために建設された建物であり、博覧会終了後は数々の美術団体によって展覧会場として借用されていた。美術に適した展示場ではなかったため、当時の美術家たちにの間で五号館に対する不満が囁かれていたが、第五回内国勧業博覧会美術館は関如来にとって、それよりもさらに窮屈、不整備、不秩序を感じるものであったことがわかる。さらに、田口掬汀や久米桂一郎らも第五回内国勧業博覧会観覧後、美術館に対する不満を美術雑誌上で述べているように[9]、この美術館は多くの美術家、美術評論家にとって満足のいくものではなかった。

この美術館で展示されたのは、「第十部　美術及工藝」に属するものである。ここで、その分類を確認したい。

第十部　美術及工藝

第五十六類　繪畫　第五十七類　彫塑　第五十八類　美術工藝

第五十九類　美術建築の圖案及模型

第四回内国勧業博覧会までは書の部門が設置されていたが、ここでは設けられていない。内国勧業博覧会において、「美術」概念が整理されていくにつれ、当初は「書画」とひと括りにされていた書と絵画とが別々の部門に置かれるようになり、それによって書は内国勧業博覧会という枠組みに適合しなくなっていった。そして第五回内国勧業博覧会ではついにその部門が設置されなくなったのである。

美術館は博覧会終了後、他の施設と同様に日露戦争の際の病院敷地及び捕虜収容所となった。その後、明治四十二年に天王寺公園として再生し、大正八年十二月には市民博物館の用地として使用されることとなった。

二　附博覧・補助博覧・開会中餘興について

ここで、附博覧及び補助博覧、開会中餘興の事例を京都博覧会から確認することとしたい。

前述の通り、京都博覧会ではいくつかの催しを博覧会会期中に設置し、これを観光事業の一環としていた。第一回から第十四回にかけての京都博覧会における附博覧及び補助博覧、開催中餘興について『京都博覧会沿革史』より抽出したものが表Ⅰである[10]。

第十回からはそれまで「附博覧」、「補助博覧」とされていたものが「開會中餘興」としてまとめられている。これらの催しは、当初はいわゆるパフォーマンス中心であったが、特に第十一回以降は展覧会もこれに含むことが多くなったことが読み取れる。

ここで、附博覧や補助博覧、開会中餘興の定義を確認したい。「附博覧ノ記事」[11]には植村正直が博覧会を盛り上げるための策を弄した結果、「博覧會ニ併ハシムルニ耳目ノ娯タル遊玩嬉戯ノ科ヲ以テス、稱シテ之ヲ附博覧ト云フ」と附博覧開催に至ったことが記されている。ここから、博覧会に正式に設置されなかったものの、観光産業の一環として併催された催しを附博覧と称していることがわかる。また、表Ⅰから補助博覧は博覧会を補うものとして設置された催しを指すものと考えられる。開会中餘興はこれの博覧会に併催された催しを総括する名称であり、附博覧、補助博覧もこれに包含された。したがって、これをその定義とすることとしたい。

表Ⅰ

第一回	明治五年	**附博覧**　賣茶ノ雅趣　都踊ノ開創　東山名所踊　河原ノ烟華　能樂ノ興行　英國領事入京者取締法　開期　學校生徒無料入場　通券　來觀　冥加金上納　府廳下渡金　御下問　御買上品
第二回	明治六年	**附博覧**　舞樂　都踊　角力　演劇　能樂
第三回	明治七年	**補助博覧**　借馬　書畫揮毫　陶磁器製造實習 **附博覧**　都踊　東山名所踊　申樂
第四回	明治八年	**補助博覧**　機械會　洋風影戯場 **附博覧**　都踊　鴨川踊　名古屋城黄金鯱　古器名品ノ寫生　各花街女紅場ノ入場
第五回	明治九年	**補助博覧**　生花　抹茶　書畫揮毫　有職衣紋ノ体儀　和歌　俳諧　連歌　狂歌　蹴鞠　圍碁　將棊　管絃　炷香
第六回	明治十年	**附博覧**　都踊　鴨河踊　東山名所踊　申樂
第七回	明治十一年	**補助博覧**　香風社尚齒會　明清樂合奏　書畫會　抹茶　鍾秀會　謠曲會 **附博覧**　前回同上　宮内庁御買上品
第九回	明治十三年	**補助博覧**　萬年青會　盆蘭會　萬年青蕙會　菜根刷剪假花會　千枚揮毫　書畫揮毫
第十回	明治十四年	**開會中餘興**　各花街女紅場生徒ノ點茶　茶會　和歌會　噺子狂言
第十一回	明治十五年	**開會中餘興**　女紅場生徒ノ賣茶　油繪展覧會　書畫展覧會　闘茶會　鳥原太夫ノ練歩
第十二回	明治十六年	**開會中餘興**　茶會　畫會　琵琶會　仕舞狂言　花街ノ屋臺曳手踊　舞囃子　古畫展覧會　出品列品觀客券料等前年
第十三回	明治十七年	**開會中餘興**　畫會　電燈試験　明清樂合奏　十四年間來觀人比較表其説明　出品列品觀者券料賣却等前年トノ比較
第十四回	明十八年	**開會中餘興**　蹴鞠　南宗畫家揮毫　素囃子一調　繪畫揮毫　千枚畫揮毫　大和繪派揮毫　壚川派揮毫　式正ノ蹴鞠　能狂言　畫学校員揮毫　白雲社揮毫　島原太夫場帽子風俗入場　出品列品觀者券料賣却等前年トノ比較

三　第五回内国勧業博覧会協賛会の発足

ここで、第五回内国勧業博覧会開催にあたって、実務的な面で重要な役割を果たした第五回内国勧業博覧会協賛会の概要を確認したい。協賛会は博覧会開催の二年前にあたる明治三十四年に発足した。その趣意書には次のようにある[12]。

本會は先づ廣く博覧會の趣旨と其盛況とを内外に皷吹し力めて來觀心を誘起し且其來觀者の便利と滿足とを計り之と同時に終始當局者の後援となり專ら公私の間に介立して諸般の附帯事業を處理經營し以て及ぶ限り此博覧會をして其効果を多大ならしめ其光彩を燦爛たらしめんことを期す

ここに「附帯事業を處理經營し」と記載されているように、協賛会は開会中餘興にあたる数々の催しに対して或いは補助金を出し、或いは主催するなど実際の運営の面でサポートした。協賛会の会長は土居通夫が務め、顧問に西村捨三、田村太兵衛、藤田伝三郎、鴻池善右衛門、菊池侃二、住友吉左衛門が就任し、相談役には上野理一や本山彦一、平瀬露香らの名も確認できる[13]。ここに、書画に対して造詣の深い人物が複数含まれていることは注目に値する。博覧会の主催者である博覧会事務局は農務省内に設置され、そのトップは大臣である平田東助が担っている。このように、博覧会事務局は東京を中心とする官によって構成されている。一方で協賛会は土居を始め大阪で活躍していた実業家を中心に構成された。実際の運営の面で協賛会が手綱を握ったことによって、次章以降で取り上げる複数の開会中餘興の開催が実現したとも考えられるのである。

四　第五回内国勧業博覧会における全国書画倶楽部の設置

第五回内国勧業博覧会の会場内には全国書画倶楽部が開設されている。これは『第五回内国勧業博覧会協賛会報告書』中に「幇助事業」として位置付けられており、まさに開会中餘興の一環であるといえる。これは、石尾松泉ほか数十名の美術家が発起人であり、大阪における第五回内国勧業博覧会開催実現に尽力した土居通夫を会長、平沼淑郎を副会長として発足した[14]。これらの人物が会長及び副会長に就任してい

ることから、大阪市の賛同を得ていたこと、商業との結び付きが強かったことがわかる。また、全国書画倶楽部は各地の賛同を得るため、明治三十六年一月頃から主任理事の吉永光城が遊説員として各地を歴訪することとなった[15]。京都では後素協会、日本南画協会、後素如雲社などの各団体の賛同を得、東京では金子堅太郎、平山成信、下條正雄、正木直彦、岡倉天心諸氏を始めとする大家を訪ねた。さらに、名古屋同好画会、東京日本美術協会、日本美術院、日本画会、丹精会、無聲会、烏合会、研精画会、文墨協会、日本絵画協会などの団体の賛同を得ることに成功した。これら各団体の賛同を得、無事に発足した全国書画倶楽部の顧問及び評議員には京阪の書家、画家が就任した[16]。この経緯からも全国書画倶楽部は第五回内国勧業博覧会に向けて新たに設置されたものであることがわかる。またこれは、実業家たちが主体となって団体を組織し、そこに書画家が招かれるという構図をとっている。これは、明治四十年に結成される観鵞会の結成過程とも共通する。観鵞会では、村山龍平、上野理一、藤澤南岳、芝川又右衛門ら十二名が幹事となり、彼らが出資者となって団体を結成し、そこに阪正臣や山田永年などを審査員として招いて展覧会を開催している[17]。このように、近代の大阪では、実業家たちがパトロンとなって作家たちの活躍を支えていたのである。全国書画倶楽部は、博覧会協賛会から約一五〇円の補助金を得[18]、実現するに至った。

全国書画倶楽部について、明治三十五年十一月二十日の『読売新聞』では次のように報じている[19]。

> 其組織は全國の書畫家を以てし別種の建築物を博覧會々場内敷地に建設し全國書畫展覧會を開き場内特に全國書畫家の揮毫場を設け汎く公衆に縦覧せしめ内は國民美術思想の喚起に資すると共に外泰西人士をして東洋美術の精華妙技を感得せしむるに勉め尚場内特に優待席を設け参觀しむる筈なりと

ここから、「東洋美術」を取り扱うものであったことがわかる。また、全国書画倶楽部は設置の目的について「美術ノ普及ヲ圖リ外ハ本邦固有ノ藝術ヲ発揮セシカ爲」[20]と言及していることからも「本邦固有ノ藝術」に拘っていたことがわかる。第五回内国勧業博覧会では書の出品部門が設置されなくなったほか、文人画や南画などが排斥される傾向が強まっていた。これを憂慮して「本邦固有ノ藝術」を奨励するために全国書画倶楽部が設置されたものと推察される。また、『日本美術協会報告』は、これについて、「書畫ヲ蒐集列陳シ博覧會會場中ハ美術上諸種ノ集會場ニ充テ閉會後ハ適宜ノ地ヲ相シテ第五回内国勧業博覧會ノ紀念トシテ永久ニ保存シ以テ將來美術上ノ機關充ツル」ことを目的として開設されたと記載している[21]。

博覧会の開会とともに全国書画倶楽部は開会式を挙行した。美術館の東北に百十六坪の土地を借用して、その会場が建設された[22]。博覧会開会後は、揮毫席が設けられ、発起人や全国書画倶楽部雇入れの書画家が代わる代わる出席した。ここでは朝から晩まで十五人ほどが並んで席画を行ったようである[23]。この中には、大阪の画家として博覧会の審査官に選ばれた人物二名も参加していたことを『読売新聞』では報じている[24]。第五回内国勧業博覧会において審査官を務めた大阪の画家は森琴石と深田政孝の二名である[25]。森琴石は明治二十二年の浪華学画会の結成に尽力し、さらに大阪における絵画共進会や絵画品評会開設に対して精力的に活動を行っていた人物である[26]。深田政孝は明治二十三年の浪華学画会絵画共進会で銅印を受賞した画家である。浪華学画会は解散したものの、第五回内国勧業博覧会で大阪画壇から審査官に選ばれたのはこれに関わりを持っていた両者であった。これらの人物は当時の大阪画壇を牽引する立場にあったといえよう。

全国書画倶楽部では、揮毫席のほか、各府県の書画家による作品が展観され、販売された。ここではただ書画の展示を行うだけではなく、書画を販売することも目的の一つとしていた。全国書画倶楽部の様子は図3に見える。書画家たちの揮毫席の上に書画が掲げられている。人びとはそれを観て、そして揮毫を依頼している。ここには、日本美術協会の依嘱によって東京の画家及び書家も出陳している。『日本美術協会報告』に名前が紹介されている書画家は計一三三名である[27]。これは日本画家、南画家を中心に構成されているが、その中には市河万庵、渡邊沙鷗、中根半嶺、中根半湖の名も確認できる。東京では、第五回内国勧業博覧会開催の前年にあたる明治三十五

年に日本美術協会内に六書協会が設置されている。そのため、六書協会とも関係の深かったこれらの人物が依嘱されることとなったのであろう。さらに沙鷗や半嶺は、明治四十年に結成し、その後、文部省美術展覧会（以下文展）や博覧会への書部門設置運動を展開したことで知られる日本書道会において、その活動の中核を担っていた人物である。ここに彼らが参画していることから、博覧会を重んじていたことがわかる。一方でここには日下部鳴鶴、近藤雪竹、前田黙鳳などの談書会のメンバーの名は見られない。鳴鶴は六書協会には参画していたものの、書家たちが六書協会を挙って脱退した後は、その後継組織である日本書道会に参加していない。鳴鶴は日本書道会が目的とする文展への書の加入に否定的であり、日本書道会結成後にそれに反する団体として明治四十一年に談書会を結成したが[28]、明治三十五年の時点ですでに沙鷗や半嶺らとは考えを異にしていたのだろう。

このように、公の分類での出品が許されなかった書家の一部は、博覧会場に併催された全国書画倶楽部に参画することによって、間接的に博覧会へと参加していたのである。

五　第五回内国勧業博覧会と泉布観における展覧会

第五回内国勧業博覧会開催に併せて、泉布観では全国新書画展覧会が開催された[29]。これは、東洋美術奨励会の主催によるもので、博覧会協賛会から二五〇円の補助金を得ている[30]。また、これに加え、日本美術協会大阪支部は大阪市製産品及び新古美術工芸品展覧会、豊公遺物展覧会及び千瓢会を泉布観に開設する計画を企てた[31]。豊公遺物展覧会は当初、西村捨三の発案によって、博覧会協賛会の事業として大阪城址に豊臣秀吉の遺物を展観する計画であったが、協賛会が日本美術協会大阪支会に交渉した結果、大阪支会が引き受けることとなった[32]。その後、会場については、大阪城内での開会は難しいと判断され、他の事業とともに泉布観において開催することが決定した。これらの大阪支会の計画に対して、博覧会協賛会は五〇〇円の補助金を出している[33]。全国書画倶楽部の活動と同様に、博覧会協賛会はこれらの活動を支援する立場にあったといえる。

会場となった泉布観は図4に見える。北区天満橋に現存しており、もとは明治四年に造弊寮の応接所として建設された建物である。二階建て煉瓦造りの建物で、大阪府最古の洋風建築として著名である。ここでは博覧会会期中以外も展観会が催されており、大阪に住まう人々の間で展覧会場として根付いていた。

豊公遺物展覧会は「古美術工藝品ノ保存及斯道ノ發達ヲ奬勵スル」ことを目的として設置された[34]。『第五回内国勧業博覧会協賛会報告書』中に「幇助事業」として位置付けられているように、これもまた開会中餘興の一環として催された。『博覧会案内記』は豊公遺物展覧会について次のように紹介している[35]。

> 會場内には千成瓢簞の馬印を初め、出來るだけ看客の目を惹くに足るべき装飾を施し、苟も豊公に縁故あるものは、甲冑、刀劍、槍、其他の武具を初め器物、書畫、圖書、彫刻、其他有ると有ゆる物品を蒐集し、來觀者をして豪放濶達の猿面冠者を偲ばしむるの趣向なりと

ここから、豊公遺物展覧会では書画も展示されていたことがわかる。書画は古美術の一分野としてその位置付けが保証されていたことで、展示が実現したのである。

展観物の一覧は『豊公遺物展覧会出品目録』[36]によってその概要が窺える。これによると、東京帝室博物館のほか、益田鈍翁や藤田、平瀬、上野、鹿田静七など全国の幅広い人物が出品していたことがわかる。ここに名が見える鹿田は鹿田松雲堂の二代目である。このように、大阪に店を構える古書籍商も参画していた。展観物には「豊太閤消息」（図5）や「浅野長政消息」、「豊太閤色紙」、「後水尾天皇宸翰」をはじめ、多くの書跡が確認できる。博覧会餘興の場では古美術としての書が多く展観されていたのである。

一方、千瓢会は、瓢々会の会主の佐野五明溪の発起によって開設された。佐野五明溪は漢学者であり、書家としても知られている人物である。千瓢会開設には、京阪の文人墨客が協力したようである[37]。後に、千瓢会の展観物について『千瓢賞餘』[38]という目録が出版されているが、これは日本美術協会大阪支会によって発行されてい

る。千瓢会は、明治三十六年三月一日から七月三十一日までという博覧会の開催期間に併せて催された。『千瓢賞餘』の題字は藤澤南岳が書写している。出品者には、山中簪篁堂や永藤朝翠堂、西尾五福堂などの古美術商のほか、南岳、平瀬、山本梅崖、森琴石、高崎親章などさまざまな人物の名が見える。大阪在住の人物が多く見えるが、他の地域からの出品も多数確認できることから、ここでは日本全国から収集された古瓢が陳列されたことがわかる。また、出品物には「銘書畫合作」や「銘山陽竹田合作」などの書画と関連するものが何点か含まれている[39]。このように、千瓢会には書画に携わる人物が出品し、加えて書画にまつわるものが展示されていることから、書画世界と深い関わりを持っていた様子が窺える。

このように、第五回内国勧業博覧会ではその開催を契機として、博覧会場以外の場においても美術展示が盛んに行われた。官設では書部門は設置されなかったものの、博覧会内に設置された全国書画倶楽部では渡邊沙鷗ら当代作家の書が展示され、泉布観では新書画展覧会が開催されるとともに豊公遺物展覧会において古美術としての書も展示されている。書は第五回内国勧業博覧会において出品部門が設けられず、したがって美術館で「美術」として展示されることはなかったが、異なる会場において「書画」として展観されることとなったのである。この背景には、大阪に住まう実業家たちの後押しがあったものと考えられる。前述の通り、大阪では明治に入ってからも煎茶会や書画会が盛んに行われている。こうした場には実業家たちの多くが顔を出しており、また時には自身の蒐集品を出品している。このように近代の大阪では、金銭的に余裕のある実業家たちの多くが書画を含む古美術の蒐集を趣味としていた。そうした実業家たちにその開催を後押しされた第五回内国勧業博覧会において、彼らの書画観が強く反映されるかたちでこれらの催しが実現したのである。

また、これらの催しものは協賛会の補助金を得、博覧会会場内に用地を与えられ、さらに各種の『博覧会案内』で紹介されているように、協賛会の支援を受けて催された。これらの活動を支援した協賛会には官製の「美術」に対して抗おうという意志は見えない。一方で、協賛会に補助を申し出た人びとにはこの意志があったものと考えられる。全国書画倶楽部に関わる書画家たちは書を内包した「本邦固有ノ藝術」を、豐公遺物展覧会に関わる実業家たちは「古美術工藝品」を保存、あるいは奨励しようとする目的でこれを企画した。協賛会は大阪において博覧会を成功させるという目的のもと、これらの催しを開会中餘興の一環として受け入れた。協賛会のメンバーの中には書画蒐集家として名高い人物の名も確認できることから、これらに対する造詣の深さもその後押しとなったものと考えられる。加えて、『直入翁寿筵図録』（明治十四年）や『墨縁奇賞』（明治二十六年）に象徴されるように、大阪では明治になってからも盛んに煎茶会や書画会といった文化活動が展開され、そこでは書と絵画を分けることなく、「書画」のくくりで扱っていた。これらのことから、明治三十年代の大阪では「書画」概念が強く根付いていたと考えられる。これを背景に「書画」というかたちでこれらは実現したのである。そしてこれは官製の「美術」という語や概念を造り出した東京ではなく、商業との結び付きが強く、東京とはまた異なった文化環境を近代まで持ち越した大阪だからこそ成し得たともいえるのである。

六　藤澤南岳『七香齋日録』にみる付博覧の実態

ここでは、藤澤南岳の日記である『七香齋日録』をもとに、博覧会の会場内に設置された全国書画倶楽部及び泉布観で開催された千瓢会や豊公遺物展覧会などの実相を考察する。

まず、南岳について確認したい。南岳は幕末から明治にかけて活動した儒学者で、通天閣の命名者として著名である。儒学者の藤澤東畡の子で、東畡から泊園書院を継承し、数千人の門人を擁した。また南岳は、文墨に親しむ生活を送っていた。『豫章堂茗讌図録』（明治四十二年）や『澱江茗讌図録』（明治四十二年）に跋文を記しているように、多くの煎茶図録からは南岳の煎茶趣味が垣間見える。加えて、明治三十五年頃に結成、書画や古典籍の展示会を定期的に行った保古会にも加わっている[40]。さらに明治四十年に創設された書道団体で、大阪博物場において毎年展覧会を開催したことで知られる観鶩会では幹事を務めるなど、明治期の大阪書道界の中心的な役割を担

っていた。

また、前述の通り、第五回内国勧業博覧会の際の千瓢会では出品者として名を連ね、『千瓢賞餘』の題字を書写しているように、千瓢会の開催を支援する立場にあった。

南岳は第五回内国勧業博覧会開催中にしばしば博覧会場や泉布観に足を運び、その様子を『七香齋日録』に詳述している。これを紐解きながら、開会中餘興の実態を確認したい。

明治三十六年四月一日の日記には南岳が泉布観に訪れた様子が記されている[41]。ここでは山本梅崖らとともに品評して回ったようである。そして、山中簪篁堂の経営者である山中精兵衛と田中楢次郎が陳列していたものを買ったことが記されており、ここから瓢の売買も行われていたことがわかる。

この日以外にも南岳が何度か泉布観を訪れている様子が『七香齋日録』には記載されている。こうした催しは、出品者同士の交流の場としても活用されていたようである。また、泉布観では千瓢会以外の催しも行われていたが、四月十四日の日記には「与山田純観泉布観桜花方盛審視豐公遺物一品一評大慰幽懐」とあり[42]、南岳が泉布観の桜花を観て、豐公遺物展覧会を審視し、一品一評した様子が記されている。これらは南岳の心を大いに慰め、穏やかな気持ちにさせるものであった。

さらに、明治三十六年五月一日の日記には泉布観を訪れた南岳が陶友会による催しを観たことが記されている[43]。ここでは椀に書画を描いて、それを焼くというイベントが開催されていた。このように、泉布観での催しは文墨世界と密接な関係にあった。

また、明治三十六年五月七日の日記には午前十時に皇后が泉布観に訪れ、それを歓迎した様子が記されている[44]。この日泉布観では、皇后のために絵の上手い女子に席上揮毫をさせ、さらに吉備舞数曲を奏でさせたようである。

『明治天皇紀』にはこの日の様子が「皇后、大阪に行啓、日本美術協會大阪支會の泉布觀に開設せる美術品展覧會を覧たまふ」と記載されている[45]。ここに登場する「美術品展覧會」とは豊公遺物展覧会や全国新書画展覧会を示しているのであろう。泉布観のイベントは、正式に第五回内国勧業博覧会の出品分類中に設けられたものではないが、第五回内国勧業博覧会のために大阪を訪れた皇后が参観しているように、その一環として催されていた。そしてそこでは席上揮毫などの実演が繰り広げられていた。

五月二十五日の南岳の日記には「訪戸塚岡本田中諸氏歸則布穀来閑話至晡後約明日之泉布観」とあり[46]、翌日に布穀と泉布観を訪れることを約束したことが記されている。そして翌日、南岳は予定通り泉布観に赴いている。明治三十六年五月十六日の日記には泉布観に岡田（岡田咬菜カ）が数百の小玩具を携えて来て、それを品評したことが記されている[47]。岡田が持参してきたものは墨搨の孝經十二冊や乾隆年間に制作された小硯をはじめとする文房具、武陵洞が描かれた小巻、青磁の観音、髙焼羅漢、花瓶、水盤など多岐にわたっていたことがわかる。ここでは博覧会の出品分類のようにそれぞれのジャンルに分けて扱うのではなく、文房具や書画類、彫刻などが書画会場さながらに一堂に陳列されていた。このように第五回内国勧業博覧会では泉布観は美術館とは異なる形で利用されていたのである。

ここに記されているように、泉布観は集会の場としても活用されていた。泉布観におけるイベントを契機として人々が集まり、そこでは展示品のほかにも誰かが持ち寄ったものを互いに品評していた。

また明治五月二十七日の日記に、南岳が独りで博覧会場内の全国書画倶楽部に赴き、そこで幹事諸氏が書画帖を作り、東宮に献上しようとしていたところに出くわしたことが記されている。そこで南岳は書画帖を点検している。この日は皇太子とその妃が第五回内国勧業博覧会のために大阪に訪れていた。これが全国書画倶楽部の幹事にも伝わり、書画帖を献上するに至ったのであろう。一方、皇太子らの行啓について、『明治天皇紀』には皇太子と皇太子妃が前日の五月二十六日に東京を出立し、「二十八日以後」に博覧会場に臨む予定であると記載されている[48]。しかし予定が早まったのか二十七日に赴いている。前述の通り、全国書画倶楽部は開会中餘興として設けられたものである。その性質上、ここには書

画揮毫席が設置されていた。展示品を陳列しているだけでなく、制作活動も展開されていた餘興の場であったからこそ、皇太子と皇太子妃に書画帖を献上することが可能だったのである。

翌月の六月上旬には皇女が第五回内国勧業博覧会に訪れている。明治三十六年六月六日の日記には、妻に皇女を見たいとせがまれた南岳が一緒に博覧会場に赴いた様子が記されている[49]。南岳の妻が皇女を見るために博覧会場へ訪れているように、こうした皇族の行啓は大阪に住む人々にとって一大イベントであったといえよう。そしてこの三日後の明治三十六年六月九日の日記には皇女が全国書画倶楽部の展示を観覧した旨が記載されている[50]。そして、これに併せて全国書画倶楽部は二十人ほどの画家に揮毫させ、これを披露していた。そこでは絵画だけでなく書の席上揮毫も行っていた。熊谷観斎は書が上手いということで来会し、柄の長い筆で揮毫し、皇女を楽しませていた様子が記されている。またこの筆は、午後に佐々木伯が試し書きをしているように、皇女が去った後は皆が試用できるように全国書画倶楽部内に設置されたようである。

ここまで南岳の日記を通して全国書画倶楽部をはじめとする書画に関わる開会中餘興の実態を確認したが、泉布観では展観物の売買も行われていたことが明らかとなった。このように、これらの開会中餘興はまた商業的な性格を併せ持っていたものと考えられる。加えて、これらのイベントには皇族が足を運んでいたこともわかった。そこでは席上揮毫を行い、あるいは書画帖を献上して皇族を楽しませようとしており、ここには絵画だけでなく書の席上揮毫も含まれている。第五回内国勧業博覧会において、書は様々なかたちで博覧会中の催しとして、訪れた人々の間で親しまれていたのである。

おわりに

ここまで見てきたように、第五回内国勧業博覧会では全国書画倶楽部や全国新書画展覧会などが併催され、ここに中根半嶺や渡邊沙鷗らが参画していた。さらに皇族の行啓に際して書画帖の献上や席上揮毫の披露を行っているように、皇族の目を楽しませる実演の一環としても書は用いられていた。そしてこれらの催しを企画した京阪の書画家の意識の中には、博覧会という枠組みの中で立場が危ぶまれていた書や南画といった「本邦固有ノ藝術」を奨励しようとする意図があった。そしてそれらの催しを後押しするものとして協賛会の存在があった。このメンバーの中には煎茶会や書画会などの場に頻繁に足を運び、さらに書画蒐集家として著名な人も含まれており、前述の書画家と同様に「本邦固有ノ藝術」を奨励しようと考える人もいたのかも知れない。

近世の大坂は木村蒹葭堂や岡田米山人といった文人が多く住まう土地であった。江戸や京に比べ、幕末の動乱の影響が少なかった大坂では、その文化環境が明治まで持ち越されることとなった。新しく首都となり、西欧に倣って近代化していく必要性を強く求められた東京とは異なり、大阪は江戸時代以来の性質を強く引き摺っていたと考えられる。そしてその中には書画環境も含まれる[51]。全国書画倶楽部やその他の開会中餘興の設置には、こうした幕末からの文化の連続性があったものと考えられる。特にこれは明治時代の大阪の文化環境に強く受け継がれていたものであり、今もなお京阪の土地に根付いている。このように、博覧会を受け入れる大衆の書画に対する志向が反映された結果、書画にまつわる開会中餘興が実現したのである。

またこの設置には、商業との結び付きの強い人々が協賛会の一員として大阪における博覧会実施の実権を握っていたからこそ為し得た側面がある。前述の通りそれらの人物には書画に造詣の深い人々も少なくなかった。大阪商業会議所会頭であった土居通夫は幼少期に三好周伯に書を学び、また南画や囲碁、浄瑠璃、俳句を嗜むなど多芸な人であった。実業家としての顔だけでなく、文化的な一面も持ち合わせていたこともこれらの催しの開設の後ろ盾となったものと考えられる。この他、実業家でありながら書画蒐集家として著名な平瀬露香が公設の機関である大阪博物場の場長に就任していることに代表されるように、大阪では書画に造詣の深い実業家が府政と強く結び付いていた。こうした大阪独自の文化環境が基盤となって第五回内

国勧業博覧会における開会中餘興の開催は実現したのである。

図1　「第五回内国勧業博覧会美術館」『第五回内国勧業博覧会紀念写真帖』（明治三十六年）掲載。

図2　「第五回内国勧業博覧会美術館」『第五回内国勧業博覧会紀念写真帖』掲載。

図3　「全国書画倶楽部」『風俗画報』（東陽堂支店、明治三十六年）三八頁掲載。

上　図4　「泉布観」『豊公遺物展覧会出品目録』掲載。

下　図5　「豊太閤消息」『豊公遺物展覧会出品目録』掲載。

注

1 大阪博物場は、その名称を一八七八年に「公立大阪博物場」、一八八四年に「府立大阪博物場」と時期によって変更しているが、本稿では大阪博物場の名で統一した。

2 埜上衛「大阪府立博物場の考察（1）―明治期公立博物館の活動―」『近畿大学短大論集』十一巻二号（一九七九年）一一三頁では、大阪博物場は一九一七年の府立商品陳列所移築によって廃止されたと言及しているが、後々田寿徳は「大阪博物場―「楽園」の盛衰」『東北芸術工科大学紀要』No. 16（東北芸術工科大学、二〇〇九年）二六頁において、大阪博物場は一九四五年の大阪大空襲によって焼失するまで存在していたことを、新資料を用いて指摘している。したがって本稿は後々田の論考を参照し、大阪博物場の廃止時期について一九四五年とした。

3 大阪博物場における書の位置付けについては拙稿「大阪博物場と同美術館―書を起点として―」『近代画説』第29号（明治美術学会、二〇二〇年）を参照されたい。

4 佐藤道信は『明治国家と近代美術―美の政治学―』（吉川弘文館、一九九六年）において、近代を迎えて西洋から「美術」概念が移入し、書が「美術」概念から置き去りにされた要因について見解を述べている。

5 第五回内国勧業博覧会開催地決定に至るまでの経緯については「第五回内国勧業博覧会と市政」『新修大阪市史』第六巻（大阪市、一九九四年）三四―三八頁に詳しい。本稿にあたりこれを参照した。

6 「大阪の美術館」『読売新聞』（一八九九年六月十九日朝刊）三面参照。

7 「第五回博覧會の敷地確定」『読売新聞』（一八九九年九月八日朝刊）一面参照。

8 關如來「第五博覧会通信　美術館（二）」『読売新聞』（一九〇三年三月二十一日朝刊）一面参照。

9 田口掬汀は「醜陋愚劣の博覧会」『新声』九編六号（一九〇三年）六頁において美術館に対して「舘内の區劃の不規律なる、光線の投射の不十分なる、通路の甚だ狭隘なる、藁草履の粉末の飛散する、寧ろ亂暴狼狽なる体裁に、驚心駭目せざるを得ざりき」と言及している。さらに、久米桂一郎は「大阪博覧会に於ける美術の待遇」『美術新報』二巻六号（一九〇三年）二〇頁において「今度の美術館の小規模でありお粗末であるのは言ふまでもない」と言及している。

10 『京都博覧会沿革史』（京都博覧協会、一九〇三年）参照。

11 前掲注10『京都博覧会沿革史』三一頁参照。

12 第五回内国勧業博覧会協賛會編「第五回内国勧業博覧会協賛會趣意書」『大阪と博覧会』（第五回内国勧業博覧会協賛會、一九〇二年）一三八頁参照。

13 「第五回内國勧業博覽會協賛會規則」『大阪商業会議所月報』一〇一号（大阪商業会議所、一九〇一年）一〇頁参照。

14 『読売新聞』（一九〇二年十一月二十日朝刊）二面参照。

15 吉永光城の各地歴訪の様子については「全国書画倶楽部」『絵画叢誌』一九二巻（東洋絵画会、一九〇三年）二頁に拠った。

16 『読売新聞』（一九〇二年十一月二十日朝刊）二面参照。

17 観鷺会及び明治期の大阪書道界の様相については別稿を設け、詳しく論じることとしたい。

18 『第五回内国勧業博覧会報告書』（大阪市役所商工課、一九〇四年）二二三頁参照。

19 前掲注16『読売新聞』参照。

20 『第五回内国勧業博覧会協賛会報告書』（第五回内国勧業博覧会協賛会、一九〇三年）二〇六頁参照。

21 「全国書画倶楽部開設」『日本美術協会報告』一六六号（一九〇三年）三八―四〇頁参照。

22 『第五回内国勧業博覧会総説博覧会案内』（金港堂、一九〇三年）一一七頁参照。

23 『読売新聞』（一九〇三年三月十四日朝刊）二面参照。

24 前掲注23『読売新聞』参照。

25 第五回内国勧業博覧会事務局編『第五回内国勧業博覧会審査報告』第10部（一九〇四年）十―十一頁参照。

26 絵画品評会は内国絵画共進会開催を受け、明治十七年に大阪博物場において開催された。また浪華学画会は明治二十二年七月に森琴石を発起人として、浪華画学校を母体として開設された団体であり、大阪において絵画共進会を開催するなどの活動を行った。これについては別稿を設け、詳しく論じることとしたい。

27 「全国書画倶楽部開設」『日本美術協会報告』一六六号（一九〇三年）三八―四〇頁参照。

28 日本書道会と談書会の関係については拙稿「明治期における書道団体の動向―山腰弘道と大日本選書奨励会を中心に―」『書学書道史研究』第29号（書学書道史学会、二〇一九年）を参照されたい。

29 前掲注22『第五回内国勧業博覧会総説博覧会案内』参照。

30 前掲注20『第五回内国勧業博覧会報告書』参照。

31 前掲注22『第五回内国勧業博覧会総説博覧会案内』参照。

32 井上熊次郎編『第五回内国勧業博覧会案内記』（考文社、一九〇三年）六八―六九頁参照。

33 前掲注20『第五回内国勧業博覧会報告書』参照。

34 前掲注20『第五回内国勧業博覧会協賛会報告書』二〇一頁参照。

35 前掲注32『第五回内国勧業博覧会案内記』参照。

36 『豊公遺物展覧会出品目録』（日本美術協会大阪支会、一九〇三年）参照。

37 前掲注32『第五回内国勧業博覧会案内記』六九頁参照。

38 『千瓢賞餘』（日本美術協会大阪支会、一九〇三年）参照。

39 『千瓢賞餘』には吉野五運が「一銘書畫合作」、森重庄三郎が「一銘山陽竹田合作」を出品した旨が記されている。

40 保古会については水田紀久「南岳先生『不苟書室日録鈔』を讀む」『近世日本漢文学史論考』（汲古書院、一九八七年）四八五―四八九頁に詳しい。また、保古会の活動の実態については別稿を設け、詳しく論じることとしたい。

41 藤澤南岳『七香齋日録』己（LH2／甲211―8）（関西大学所蔵、一九〇三年）参照。また、『七香齋日録』については吾妻重二編『関西大学泊園文庫自筆稿本目録稿（甲部）』（関西大学アジア文化センター、二〇一二年）に詳しい。本稿ではこの整理番号にしたがって記載した。

42 前掲注41『七香齋日録』参照。

43 前掲注41『七香齋日録』参照。

44 前掲注41『七香齋日録』参照。

45 『明治天皇紀』第十（吉川弘文館、一九七四年）四一九頁参照。

46 前掲注41『七香齋日録』参照。

47 前掲注41『七香齋日録』参照。

48 前掲注45『明治天皇紀』四三八頁参照。

49 前掲注41『七香齋日録』参照。

50 前掲注41『七香齋日録』参照。

51 近世大坂の書画環境については中山真一郎著『木村兼葭堂のサロン』（新潮社、二〇〇〇年）に詳しい。ここでは、木村兼葭堂を中心に多くの文人たちが活発に活動していた様子が確認できる。